

源氏一族相剋の歴史 「常盤御前と子三人の末路」

加藤導男

はじめに

皆さんは、源氏と平家（平家は平^{たいら}の姓を名乗る一族。平氏^{へいし}の意。本稿では平家とさせて頂きます）のどちらがお好きですか。何故か大半の方は源氏が好みの感じですが……。

平家については『平家物語』の序文に「祇園精舎の鐘の声（中略）……盛者必衰の理^{ことわり}をあらはす……」の通り、源氏に京を追われ、文治元年（1185）、一の谷、屋島の戦いと敗れ、西海の壇ノ浦にて、海の藻屑と消え、一族は滅亡した。一方、源氏はこの年、源頼朝が守護・地頭設置の勅許を得て、鎌倉幕府は発足したが、二代将軍、実朝は建保七年（1219）、甥の公暁に暗殺され、源氏将軍は僅か三十四年間で終焉した。

今回、源氏一族内、骨肉の争いの一例でもある常盤御前の三人の

子の悲運の末路を追ってみた……。

◇源氏は一族骨肉の争いの連鎖……

別紙には、源氏の略系図を掲載したが、保元の乱での為義と嫡男義朝との争いは有名であり、為義と義朝以外の息子達は、崇徳上皇側につき、義朝は後白河天皇側にと分かれ戦った。上皇側は敗北し、為義と息子達は、斬首され、為朝は島送りになったのである。

しかし、義家以前の源氏、八幡太郎義家以下の代でも、親兄弟・叔父甥等との争いが絶えず、平家が清盛という不世出の英雄のもとで、一族相和して栄え、清盛の死後には、手を取り合って滅んでいったのと違っているのである。

◇父・弟達と死闘を重ねた源義朝

保安四年（1123）―永暦元年（1160）。為義の長男。平治

の乱で平清盛に敗れ、東に落ち延びる途中、尾張国内海荘で、配下の長田忠致に騙し討ちにあい落命する。

義朝には、男子九人がいた（女子は二人）。長男は義平（母は橋本宿の遊女か）。悪源太義平ともいい、久寿二年（1155）、武蔵国比企郡大蔵館の叔父の源義賢を攻め滅ぼす。平治の乱では六条河原にて処刑された。

次男は朝長（母は波多野義通の妹）。平治の乱で深手を負い落命。

三男は頼朝。母は熱田大宮司の娘である。鎌倉幕府初代将軍。

四男義門は早世。五男希義。二人は頼朝の同母弟。希義の死については諸説があるが、治承四年（1180）、兄頼朝の挙兵を受け合力との疑いで追討令が出され、年越山（現高知県）で討ち取られた。

六男は範頼（母は池田宿の遊女）。平家討伐に功績あったが、頼朝に謀反の疑いにより、建久四年（1193）誅殺される。

七男全成、八男義円、九男義経は何れも、常盤御前の子である。

常盤御前、及び全成、義円、義経については後述。

◇数奇な運命を辿った常盤御前

後世の作とされる『平治物語』には、義経達の母常盤のことが載っています。「大宮左大臣 伊通これみち公の中宮御所へ、（中略）千人召されて百人えらび、百人より十人えらび、十人がうちの一にて、この常盤をまゐらせられたり」と。

そして、「九条院の雑仕女（雑役・走使いに従事する下級の女官）」として、九条院（藤原呈子）に仕えている。この九条院は父が藤原伊通で、久安四年（1148）に鳥羽院の後であった美福門院に引き取られ、摂政藤原忠通の養女として近衛天皇の中宮となっていた。従って、源義朝が常盤を知ったのは、久安四年頃ではないかとしている（五味文彦著「源義経」より一部引用）。

常盤御前は、義朝が落命したことを知り、幼い三人の子の手を引いて京を逃れ大和に避難した。しかし母の関屋が平家に責められているとの噂を聞き京六波羅へ出頭する。

常盤は平清盛に、三人の子の代わりに、我が身を捨てると涙ながらの訴えに清盛は応じ、三人を助命する。清盛は常盤の美貌に負け、

一室に住ませ、女子一人を儲けた（「廊の御方」と称される）。

その後、清盛から遠ざけられた常盤は大藏卿藤原長成に嫁し、能成、ほか女子を産んだ。

源平合戦後、頼朝と義経との不穏な状況下、義経の愛妾静御前は捕らえられ、鎌倉に拘引された。

常盤御前とその娘も生け捕られが、鎌倉への護送はなかったようだ。しかし、常盤御前のその後の消息等は不明である。

◇全成・本人と息子二人は誅殺、

娘の後裔は阿野廉子……

仁平三年（1153）―建仁三年（1203）。幼名今若丸、後に阿野全成。前記の通り、母常盤と三兄弟は、平清盛に許された後に全成は醍醐寺に入り、その後出家した。

全成は治承四年（1180）、頼朝の挙兵に参じる。遠江国阿野庄を領し、阿野氏を名乗るが、幕府内での活動は不明。その妻阿波局（北条政子の実妹）が三代将軍実朝の乳母となった関係から、頼朝没後は実朝に可成り近い立場にあったと推測される。

建仁三年（1203）五月、突

然謀反の科により、捕らえられ、宇都宮氏預けられた。そして、翌月の『吾妻鏡』には……

「六月二十三日、八田知家仰せを奉り、下野国に於いて、阿野法橋全成を誅す」とあり、又翌月には、「去ぬる十六日、在京の御家人等を催し遣わし、東山延年寺に於いて、播磨公頼全（全成法橋が息）を窺い、これを誅戮せしむ云々」謀反の科とあるが、詳細については全く触れてはいない。実態は全く不明である。

全成のもう一人の男子時元は、全成が誅殺されて十六年後の建保七年、「多勢を引率し、城郭を深山に構いと叛乱を企てた」として、幕府は金窪行親等を派遣したとある。『吾妻鏡』の七月廿二日条には「発遣の勇士、駿河国阿野郡に至り、時元ならびに伴類悉く敗北するなり」とある。

しかし、全成の娘は三条公^{きん}と結婚し、その後阿野姓を名乗り、

その後裔は約百五十年程後に、阿野廉子が後醍醐天皇妃となり、廉子の産んだ子が後村上天皇となったのである。その後、阿野氏は連綿と続き、明治期の華族を経て、

今日に至っている。

◇義円・「墨俣川の戦」で勇壮に戦

い短い生涯を終える

久寿二年（1155）―養和元年（1181）。幼名乙若丸、初め園城寺にて出家して卿公（きょうのみみ）円成となり、後白河天皇の皇子円恵法親王の坊官を務めていた。「卿公」は母常盤が再婚した一条大蔵卿にちなみ命名したと考えられる。

異母兄の頼朝が打倒平家の兵を挙げるとその指揮下に合流し、亡父義朝から一字とり、義円と改名した。

義円に関する文書や伝聞等は少ないが『吾妻鏡』等から引用し、最期の戦を纏めると以下の通りとなる。

治承四年（1180）、源頼政は後白河天皇の皇子以人王を奉じ、平家討伐の令旨を諸国に伝えた。この事件を契機として、源頼朝や各地の武士が相次ぎ蜂起し、全国的な内乱が始まった。

翌年の養和元年（1181）に平清盛は病死する。

平家は平重衡を総大将として美濃源氏攻めの為、七千余騎が墨俣川西岸に陣を構えた。

一方、源氏は行家が千余騎の軍勢を率いて川の東岸に着陣する。

頼朝は平家の軍勢の多さを聞き、弟の義円に千余騎をつけ、西上させたが、行家との軍とは合流せず、二町（約二四〇メートル）を隔てて着陣したのである。

その時、義円は単騎敵陣に夜襲を仕掛けようと試みるが、失敗、平家家人の高橋盛綱に討ち取られたのである。享年に二十七歳。

行家も相戦うも惨敗。源氏は六百九十余名が命を落とした。行家等は命からがら、敗走していったのである。

義円の遺児 よしなり 義成は愛智荘（現愛知県愛知郡）を領し、祖となった。

義円の墓は岐阜県大垣市墨俣町上宿にあり、旧墨俣町の文化財に指定されている。また、すぐ近くには「義円公園」があり、「墨俣川合戦の碑」や「義円地蔵」などがある。

◇源義経・悲劇のヒーロー―「判官びいき」も前半生は謎だらけ

平治元年（1159）―文治五年（1189）。幼名は牛若丸。通称は九郎。父義朝が敗死し、洛北

鞍馬寺に預けられた。しかし成長するに及び、自ら元服。当寺を脱出して、奥州平泉の藤原秀衡を頼った。

治承四年（1180）八月、伊豆で兄頼朝が挙兵すると、ただちに軍門に下った。

以後、義経が源平合戦で源氏勝利に大功績を上げたことや、頼朝に疎まれ、奥州平泉に落延びて、文治五年（1189）閏四月三十日、三十一歳で没したことは、どなたも周知しておられますので、それまでのことは割愛させて頂きます。

紙面の関係上、内容等について言及しませんが、下記に簡単に義経達の逸話や伝説を列挙いたします。

一． 義経たち三兄弟は平家の監視がありながら、何故、寺から出られたのか。

二． 義経の前半生はどのようなものであったのか。

三． 全成は「科により誅殺された」としているが、具体的に何があったのか。

四． 義経は容貌等から途中、入れ替わって、平泉藤原氏の者が成り代わったのではな

いか。

五． 義経の北行伝説。

六． 義経の北海道に渡ったあとモンゴルに行き、ジンギスハーンとなった伝説。

∴ ∴ ∴

今回、この投稿に際して、以前から親交頂いていた松葉屋幸則様（前静岡歴史研究会会員、現駿河歴史研究会会員）より全成についての投稿文を寄贈して頂き、参考とさせて頂きました。

また、義円については、文献等が探せず、ネットで検索し、岐阜県大垣図書館に電話を架け、その歴史研究グループの児玉様にお願いし、義円に関する文献をコピーして頂き、郵送してもらいました。

この紙面上ではありますが、松葉屋様と児玉様に、厚く御礼申し上げます。（完）

「参考文献」

『阿野全成（義経の兄）とその後裔の研究』 松葉屋幸則

駿河歴史研究会

『大垣市史』

大垣市

『濃飛哀史譚』川口半平 創研社

『源平墨俣川の戦』

墨俣町郷土史研究会

『全訳吾妻鏡』 永原慶二

新人物往来社

『源義経』 五味文彦 岩波書店

『源氏一族のすべて』

奥富敬之編 新人物往来社

『平家物語を知る事典』

日下力 東京堂出版

別紙 1